

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	夏目漱石「古別離」と『文選』
Author(s)	屋敷, 信晴
Citation	中國中世文學研究 , 76 : 223 - 243
Issue Date	2023-03-28
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054535">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054535</a>
Right	
Relation	



## 夏目漱石「古別離」と『文選』

屋敷信晴

### 一 はじめに

明治を代表する文豪の一人、夏目漱石が幼少時より漢籍に親しんでいたことはよく知られている。例えば一高時代に全文を漢文で執筆した紀行文『木屑録』の序に次のようにある<sup>[1]</sup>。

余儿时、誦唐宋數千言、喜作爲文章。或極意彫琢、經旬而始成。或咄嗟衝口而發、自覺澹然有樸氣。竊謂、古作者豈難臻哉。遂有意于以文立身。(余児たりし時、唐宋の數千言を誦し、作りて文章を爲すを喜ぶ。或いは意を極めて彫琢し、旬を経て始めて成る。或いは咄嗟に口を衝きて發し、自ら澹然として樸氣有るを覺ゆ。竊かに謂へらく、古の作者、豈に臻り難からんや。遂に文を以て身を立つるに意有り。)

この記載によると、漱石はもともと漢詩文によつて身を立たいと考えていたという。しかしその後、自分の経験や知識の不足を悟り、英文学に転向してしまった。

漱石の創作活動の中で漢詩文が重要な意義を持つていることは確かであり、その位置を明らかにすることは漱石研究に於いて重要な問題であると言えるだろう。

漱石が体系的に漢詩文を学んだのは、明治十四(一八八一)年四月から一年ほどの間、漢学塾二松学舎で学んだ時であろうと思われる<sup>[2]</sup>。しかし何より漱石の漢詩文の力をより引き上げたのは、正岡子規との出会いである。正岡子規は短歌・俳句の革新者として知られているが、漢詩文も得意としていた。彼の外祖父大原観山は松山藩の儒者であったので、最初は観山から、観山没後は土屋久明から漢文の手ほどきを受けている<sup>[3]</sup>。

余は幼時より何故か詩歌を好むの傾向を現はしたり余が八九歳の頃外祖父観山翁のもとへ素読に行きたり：(中略)：其後観山翁は間もなく物故せられしがひきつゞきて土屋久明先生の処へ素読に行きしかば終に此先生につきて詩を作るの法即ち幼学便覧を携へ行きて平仄のならべかたを習ひしは明治十一年の夏にてそれより五言絶句を毎日一ツづゝ作りて見てもらひたり斯くの如き者数月にて中絶せしが後数月を経て又もやはじめたり

(正岡子規『筆まか勢』第一編<sup>[4]</sup>)

子規はその後も折に触れて漢詩を残しており、『子規全

しかし実際はロンドン時代を除いてほぼ間断なく漢詩文が残されており、『漱石全集』第十八巻「漢詩文」には詩が二百八首、文が六編、未定稿が八篇収められている。また『明暗』執筆中に書かれた手紙には、『明暗』を書いていると俗に染まった気分になるので、毎日漢詩を作ることにしていると述べたことはよく知られている<sup>[5]</sup>。また漱石門下の一人、小宮豊隆は次のように言う。

漱石は『草枕』を書き出す前に『楚辭』を讀んだのださうである。是は『楚辭』の世界に自分の頭を同化させる目的でもあつたには違ひないが、然しそれよりも『楚辭』の絢爛豊富な語彙に觸れて、自分の中に蓄積されてゐる語彙を掘り起し、それを一―手近に待機させて用に立てる爲だつたのだらうと思ふ。『草枕』の語彙には『楚辭』から來たと思はれるものも、相當ある。然し此所では漱石の讀んだ漢籍の中からあらゆる語彙が、自由自在に驅使されて、大きな寶石匣をぶちまけてもしたやうに、實に燦爛たる世界が咒出されてゐるのである<sup>[6]</sup>。

集』に収められた「漢詩稿」には六百三十首もの詩が収められている<sup>[7]</sup>。

漱石と子規が交流を持ったのは、明治二十二(一八九九)年一月が始まりであつたという。冒頭でも触れた『木屑録』とは、明治二十二(一八八九)年八月、漱石が第一高等中学校の夏休みに友人四人と出かけた房総旅行の記録である。子規はその年五月に喀血し、七月から松山へ療養に帰っていた。その房総旅行の記録を全文漢文で書き記し、後に子規に見せたのが『木屑録』である。『木屑録』を見た子規は漱石の漢文での作文能力に大変に驚いたという。子規の『木屑録』評に以下のようにある<sup>[8]</sup>。

余知吾兄久矣。而与吾兄交者、則始于今年一月也。余初来東都、求友数年、未得一人。及知吾兄、乃竊有所期。而其至辱知己、而憶前日、其所得于吾兄、甚過前所期矣。於是乎余始得一益友、其喜可知也。余知吾兄長于英文也久、而見吾兄漢文、則始于此木屑録也。(余吾兄を知ること久し。而るに吾兄と交はるは、則ち今年一月に始まるなり。余初めて東都に來たり、友を求むること数年なるも、未だ一人も得ず。吾兄を知るに及び、乃ち竊かに期する所有り。而して其の知己を辱くするに至り、而して前日を憶へば、其の吾兄に得る所は、甚だ前に期する所に過ぐ。是に於いてか余始めて一益友を得、其の喜び知るべきなり。余吾兄の英文に長ずるを知るや久し、而るに吾兄の漢文を

見るは、則ち此の『木屑録』に始まるなり。)

これに続く部分では、西洋の学問に通じる者は東洋の学問は苦手であろうと思つていたら、漱石の漢詩文の見事に驚嘆したといい、「如吾兄者、千萬年一人焉耳。而余幸得接咳嗽、豈可不敬而愛之哉。」(吾兄の如き者は、千万年に一人のみ。而るに余幸ひにして咳嗽に接するを得、豈に敬ひて之を愛せざるべけんや。)とまで激賞する。その後漱石と子規は主に手紙を通して漢詩や俳句のやりとりをしており、しばしば子規が朱で批評を加えて返している。

その交わされた手紙の中の一つ、明治三十二(一八九九)年五月十九日に漱石が熊本から子規に送った手紙に次のような詩が記されている<sup>10)</sup>。

- 夏目漱石「古別離」<sup>11)</sup>
- 1 上樓湘水綠 樓に上れば湘水緑に
  - 2 捲簾明月來 簾を捲けば明月來たる
  - 3 雙袖薔薇香 双袖 薔薇の香
  - 4 千金琥珀杯 千金 琥珀の杯
  - 5 窈窕鳴紫簫 窈窕として紫簫を鳴らし
  - 6 徙倚暗淚催 徙倚して暗淚催す
  - 7 二八纒畫眉 二八 纒かに眉を画き
  - 8 早識別離哀 早くも別離の哀を識る
  - 9 再會期何日 再會 期すること何れの日か

高で出されていた同人誌『龍南會雜誌』第七十七号(明治三十三(一九〇〇)年二月)にも雨山の評語とともに掲載されているところを見ると、かなり意を注いだ作品であったと言えそうである<sup>12)</sup>。

それでは漱石は『文選』をどのように読み、そこから得たものを「古別離」の中にもどのように組み込んだのか。そこには漱石にとつての『文選』、近代日本の知識人にとつての『文選』の一端を知る手がかりがあるように思われる。そこで本稿では、この「古別離」と『文選』の関係について考えてみたい。

## 二 「古別離」について

漱石の漢詩に関しては多くの研究があり、漱石「古別離」についてもさまざまな解釈が行われている<sup>13)</sup>。例えば漱石の娘婿である松岡謙の『漱石の漢詩』では次のように述べる<sup>14)</sup>。

この物語詩は、前漢武帝の寵臣、司馬相如とその夫人卓文君とのそもそものなれそめを詠じたもの。卓文君は臨邛の富豪卓王孫の女、相如が同家に行った時、年若い文君を見そめ、琴を弾じて誘惑し、とうとう仕とめた話は有名である。その第二幕がこの詩の場面だと見てよからう。

松岡氏がこの詩を司馬相如と卓文君の物語であると考

- 10 臨江思逸哉 江に臨みて思ひ逸かなるかな
- 11 徒道不相忘 徒らに道ふ相忘れずと
- 12 君心曷得回 君が心曷ぞ回らずを得ん
- 13 迢迢從此去 迢迢 此より去り
- 14 前路白雲堆 前路 白雲 堆し
- 15 撫君金錯刀 君が金錯の刀を撫し
- 16 憐君奪錦才 君が奪錦の才を憐れむ
- 17 不贈貂檐褕 貂檐褕を贈られざるも
- 18 却報英瓊瑰 却て英瓊瑰を報ゆ
- 19 春風吹翠鬢 春風 翠鬢を吹き
- 20 悵切下高台 悵切 高台より下る
- 21 欲遣君子佩 君子に佩を遣らんと欲し
- 22 蘭渚起徘徊 蘭渚 起ちて徘徊す

手紙の末尾には「右は先日市中散歩の折古本屋で文選を一部購求帰宅の上二三枚通読致候結果に候どうせ真似事故碌なもの出来ず候へども一夜漬の手品を一寸御披露申上候」とあり<sup>15)</sup>、この詩は『文選』を読んで、それに基づいて作ったものだという。

ここで漱石は「二三枚通読致候」「どうせ真似事故碌なものは出来ず」「一夜漬の手品」などと述べているが、実際は手紙の本文に「批園は雨山道人に御座候」というように、手紙を出す一ヶ月前の四月に当時第五高等学校同僚の漢文教師長尾雨山の添削を受けており、決して文字通り一夜漬で作ったものではない。また翌年には五

える理由は不明だが、吉川幸次郎『漱石詩注』も「先生のこの歌も、夫と別れ住む佳人の思いを、その独白としてのべる。」<sup>16)</sup>と言い<sup>17)</sup>、故事を扱った物語的作品としている。

一方飯田利行氏は当時の漱石の状況に鑑みて、この詩を漱石自身の大塚楠緒子に対する気持ちを詠んだものと解している<sup>18)</sup>。

大塚楠緒子と小屋保治との縁談が、ほぼまとまりかけた状況にあつたため、漱石は心中のはなはだ平らかならぬさまをこの詩に託して吐露したようである。

また小坂晋氏は、この詩の視点人物は大塚楠緒子の仮託であり、表面的には彼女の小屋保治に対する思いを詠んだものであるが、実はその底流には漱石の大塚楠緒子に対する感情が存在する<sup>19)</sup>と考えている<sup>16)</sup>。

要するにこの漢詩は、保治留学中、夫と別れ住む佳人楠緒子の淋しい生活と心中を推し測り、中国の貴夫人の姿に変えて、その感情の独白として詠んだものである。…(中略)…この漢詩全体には漱石の片思いの情が、内に切々と流れているが、…(中略)…いずれにせよ、楠緒子を理想的夫人と崇め、せめて楠緒子の気持になることで、幻想の世界において、自からの憧れを満たしている漱石の心中察するに余りある悲し

い漢詩である。

飯田氏や小坂氏が指摘するような、現実の漱石の恋愛事情を背景に置いて解釈すべきかどうかは判断が難しいが、本稿ではそもそも漱石「古別離」が子規に送った手紙に書き記されたものであることから、中村宏氏が『漱石漢詩の世界』で「古詩に刺戟されて作った手すさびではあるが、内面には子規との別離が意識にありそうである。」と言うように<sup>[17]</sup>、あくまで子規に対する漱石の思いを述べたものとして考えたい。

なお『文選』には「古別離」という題の詩は収められていない。近い名称としては、江淹「雜体詩三十首・古別離」(『文選』卷三十一)が挙げられる<sup>[18]</sup>。

### 江淹「雜体詩三十首・古別離」

- 1 遠與君別者 遠く君と別れ
- 2 乃至雁門關 乃ち雁門関に至る
- 3 黄雲蔽千里 黄雲千里を蔽ひ
- 4 遊子何時還 遊子何れの時にか還る
- 5 送君如昨日 君を送ること昨日の如きも
- 6 簷前露已團 簷前露已に団かなり
- 7 不惜蕙草晚 蕙草の晩るるを惜しまず
- 8 所悲道里寒 悲しむ所は道里の寒からんこと
- 9 君在天一涯 君天の一涯に在り

漱石「古別離」と江淹「古別離」を比べてみると、女性が大方向に在る男性を思いやるという全体的な内容は共通しており、表現にも共通する部分がある。例えば江淹「古別離」の第3句「黄雲蔽千里」(黄雲千里を蔽ふ)は、砂塵に黄ばんだ雲に遮られて相手の姿が見えないという意味と思われるが、これは漱石「古別離」の第14句「前路白雲堆」(前路白雲堆し)と通ずるように思われる。また江淹「古別離」の第4句「遊子何時還」(遊子何れの時にか還る)も漱石「古別離」の第9句「再會期何日」(再會期すること何れの日か)に通ずると思われる。しかし全体の枠組みとしては共通しているとはいっても、表現的にはそれほど共通しているとは言えない。それでは漱石はなぜこの作品に「古別離」に類似した「古別離」という詩題を付けたのか。これを考える手がかりになるのは、この詩に付けられた李善注である。

江之此製、非直學其體、而亦兼用其文。故各自引文而爲之證、其無文者乃他説。(江の此の製、直だに其の体を学ぶのみに非ず、亦た兼ねて其の文を用ふ。故に

各おの自ら文を引ききて之が証と爲し、其の文無き者は乃ち他説なり。)

これは江淹「雜体詩」全体の作詩法を述べたものであるが、江淹「古別離」について言えば、別れをテーマとする古詩から表現を借りてきて作っていることになる。漱石が李善注を見ているかどうかは分からないが、実際に江淹の作品を見れば、古詩の表現の組み合わせでできていることは分かっただろう。漱石はその手法を参考に、別れをテーマとする古詩から表現を借りてくるという手法を踏襲したのではないか。そうであるとすれば、漱石は具体的に『文選』のどの作品からどのように表現を持って来たのであろうか。

### 三 張衡「四愁詩」との重なり

先行研究によれば、漱石「古別離」の第15句から第18句の四句については張衡「四愁詩」(『文選』卷二十九)に基づくと言われている。

張衡「四愁詩」は四段構成になっており、それぞれ女のところに遠くに居る男性から贈り物が届いたが、あまりにも遠くてこちらからの贈り物は届けることができない、という嘆きをリフレインするものである。例えば「一思曰」(一の思ひに曰く)に以下のようにある。

- 10 妾身長別離 妾が身長へに別離す
- 11 願一見顔色 一たび顔色を見んことを願ふも
- 12 不異瓊樹枝 瓊樹の枝に異ならず
- 13 兔絲及水萍 兔絲及び水萍は
- 14 所寄終不移 寄る所終に移らず

- 1 我所思兮在太山 我が思ふ所 太山に在り
- 2 欲往從之梁父艱 往きて之に従はんと欲するも
- 3 側身東望涕霑翰 身を側て東のかた望めば涕翰を霑す
- 4 美人贈我金錯刀 美人我に金錯刀を贈る
- 5 何以報之英瓊瑤 何を以て之に報ぜん 英瓊瑤
- 6 路遠莫致倚逍遙 路遠くして致す莫く倚りて逍遙す
- 7 何爲懷憂心煩勞 何為れぞ憂ひを懷きて心煩勞する

(『文選』卷二十九)

この「一思曰」第4句に見られる「金錯刀」は漱石「古別離」第15句にも「撫君金錯刀」(君が金錯の刀を撫す)と、相手から贈られて手元にある思い出の品として登場する。また「一思曰」第5句の「英瓊瑤」は漱石「古別離」第18句の「却報英瓊瑰」(却て英瓊瑰を報ゆ)の「英瓊瑰」と同じで、こちらから金錯刀の返礼として贈りたい瓊玉のことだと思われる<sup>[19]</sup>。また漱石「古別離」第17句「貂檐楡」は「三思曰」に次のようにあり、やはり遠方の男性から贈られた貂の皮衣のことである。

美人贈我貂檐楡 美人我に貂檐楡を贈る  
何以報之明月珠 何を以てか之に報いん 明月珠

張衡「四愁詩・一思曰」

こうしてみると、この第15句から第18句までの四句は明らかに漱石「古別離」が張衡「四愁詩」を踏まえていることが分かる。ただし全くそのままという訳ではなく、漱石「古別離」第17句では、貂檐楡は贈られてはいないけれども、こちらから珮玉を贈りたいと詠っている。

この四句以外にも、漱石「古別離」第1句に出てくる「湘水」も「二思曰」に「我所思兮在桂林、欲往從之湘水深。」（我が思ふ所桂林に在り、往きて之に従はんと欲するも湘水深し。）と見える。

この張衡「四愁詩」は、『文選』で附せられている序文によれば、河間国の相として赴任した張衡は河間国の政治腐敗を掃いたもの、天下が次第に混乱していったがために志を得ないで鬱鬱とした。そこで「四愁詩」を作り、屈原に倣って比喻を用いつつ君主に自分の思いを伝えようとしたのだという<sup>20</sup>。この序文の説明に従えば、「四愁詩」は屈原「離騷」を祖型として、自身の志が果たせぬという思いを離ればなれの男女の思いに喩えて訴えかけるものだということになる。漱石がこの序を踏まえて「四愁詩」を用いたのであれば、そこには漱石の何らかの意図があると考えて良いだろう。

#### 四 「古詩十九首」との重なり

他にも漱石「古別離」と『文選』の表現の重なり具合

またここに引用した部分に見える「起徘徊」は、漱石「古別離」でも最後に「蘭渚起徘徊」（蘭渚 起ちて徘徊す）と使われている。

#### 3 雙袖薔薇香 4 千金琥珀杯

両の袖に薔薇の香りというのは、女性の両袖から薔薇の香りが漂うということかと思われるが、似たシチュエーションが其九に見られる。

庭中有奇樹	庭中に奇樹有り
綠葉發華滋	綠葉華滋を發す
攀條折其榮	條を攀きて其の榮を折り
將以遺所思	將に以て思ふ所に遺らん
馨香盈懷袖	馨香懷袖に盈つるも
路遠莫致之	路遠くして之を致す莫し

（其九）

この詩は女性が庭に咲いた美しい花を遠方の男性に贈りたいと思ひ、手折って懐に入れたけれども、やはり遠くで贈れない、というものである。これを踏まえるならば、漱石「古別離」の主人公たる女性もまた相手を思つて薔薇を手折って袖に入れたけれども贈れなかつたということになるうか。

を調べていくと、「四愁詩」以外にも多くの類例が見つかる。中でも「古詩十九首」（『文選』卷二十九）との間では表現の類似が全体に渡って顕著に見られる。そこで続いて漱石「古別離」の冒頭から順に「古詩十九首」との重なりについて検討してみたい。

#### 1 上樓湘水綠 2 捲簾明月來

思慕する男性と離ればなれになった女性が高殿に登つて物思いにふけるというシチュエーションは、所謂「楼上の思婦」として知られる<sup>21</sup>。漱石「古別離」もその系譜に当てはまるものと言えるが、「古詩十九首」其二はその初期のものとして知られている。

盈盈樓上女	盈盈たり樓上の女
皎皎當窓牖	皎皎として窓牖に当たる

（其二）

また遠方の男性を思う独り寝の女性が月が照らすというシチュエーションはしばしば見られるものであるが、其十九にも見られる。

明月何皎皎	明月何ぞ皎皎たる
照我羅床幃	我が羅床の幃を照らす
憂愁不能寐	憂愁して寐ぬる能はず
攬衣起徘徊	衣を攬りて起ちて徘徊す

（其十九）

#### 5 窈窕鳴紫簫 6 徙倚暗淚催

「徙倚」は行ったり来たりしてたちもとおることであるが、この言葉は其十六に見える。

徙倚懷感傷	徙倚して感傷を懷き
垂涕沾雙扉	涕を垂れて双扉を沾す

（其十六）

この其十六の詩は夫と離ればなれになった妻の悲しみを詠うものであるが、妻が夫のことを思いつつうろうろと歩くさまが「徙倚」と表されている。一方漱石「古別離」でも、相手を思つてたちもとおりつつ人知れぬ涙を流すといい、概ね共通すると言える。

#### 9 再會期何日 10 臨江思邈哉

第九句「再會期何日」（再会 期すること何れの日か）は女性が男性に対して、再び会える日は一体何時になるうかと歎くのだが、類似した表現は其一に見られる。

道路阻且長	道路阻しくして且つ長し
會面安可知	會面安んぞ知るべけん

（其一）

言葉としてはあまり直接重なってはいないが、遠くにいる人を思いつつ「一体何時会えるだろうか。」と訴えか

ける心境は共通していると言えるだろう。

13 迢迢從此去 14 前路白雲堆

男性は遙か遠く去って行ってしまった、彼が去って行った道には白雲がうずたかく積もって見えないということであるが、「迢迢」は其十に見られる。

迢迢牽牛星 迢迢たり牽牛星  
皎皎河漢女 皎皎たり河漢の女 (其十)

其十は七夕の物語について詠んだもので、その冒頭で牽牛星が遙かに離れていることを表す表現として「迢迢」という言葉が見られる。これは星のことではあるが、牽牛と織女の二人が遠く隔たっていることを表すと考えれば、同じ使い方と言える。

21 欲遺君子佩 22 蘭渚起徘徊

遠方にいる男性に贈り物を届けたいというのは前章で取り上げた張衡「四愁詩」にも見られたが、其六にも見られる。

涉江采芙蓉 江を涉りて芙蓉を采る  
蘭澤多芳草 蘭沢 芳草多し

漱石「古別離」第2句に見られる簾と月の組み合わせについては『文選』にいくつか類例が見られる。例えば次のような例がある。

張華「情詩二首」其一  
清風動帷簾 清風 帷簾を動かし  
晨月照幽房 晨月 幽房を照らす  
佳人處遐遠 佳人 遐遠に処り  
蘭室無容光 蘭室 容光無し  
〔文選〕卷二十九

謝惠連「七月七日夜詠牛女」  
落日隱檐楹 落日 檐楹に隠れ  
升月照簾櫳 升月 簾櫳を照らす  
〔文選〕卷三十

江淹「雜體詩三十首・張司空離情華」  
秋月照簾籠 秋月 簾籠を照らし  
懸光入丹墀 懸光 丹墀に入る  
〔文選〕卷三十一

張華「情詩」は遠方にいる男性に対する女性の思いを、謝惠連「七月七日夜詠牛女」は牽牛織女の逢瀬を詠うものである。江淹「張司空離情華」は詩題にもあるとおり、張華「情詩二首」を踏まえた模擬詩である。江淹の詩は

采之欲遺誰 之を采りて誰にか遺らんと欲する  
所思在遠道 思ふ所遠道に在り (其六)

この其六では女性のいる場所が蘭の茂る水辺となっており、漱石「古別離」の第22句「蘭渚」と重なる。また同じく第22句「起徘徊」は先に挙げた其十九にも「攬衣起徘徊」見えることを指摘した。

こうして見ていくと、漱石「古別離」には古詩十九首と類似する表現やシチュエーションが大量に見られることが分かる。しかもここで引用した「古詩十九首」其一・其二・其六・其九・其十・其十六・其十九は、全て女性の立場から、遠く離れた男性を思う心情を詠ったものである。つまり漱石は「古詩十九首」の中から思慕する男性と離ればなれになった女性の思いというテーマの作品をピックアップし、そこから表現やシチュエーションを抽出・参照していると考えられる。

### 五 他の『文選』所収詩との重なり

以上述べたように、『文選』との表現の重なりは「古詩十九首」が中心を成しているが、「古詩十九首」以外の詩からの引用も見られる。これも順に見てみたい。

1 上樓湘水綠 2 捲簾明月來

張華の詩を踏まえた模擬詩であるから当然としても、前者二首とも離ればなれの男女を詠うものである点が「古詩十九首」に見られた傾向と共通している。

3 雙袖薔薇香 4 千金琥珀杯

先に女性の両袖から花の香りが漂うという例として「古詩十九首」其九を挙げたが、同様に女性の袖から香りがするという例として、謝惠連「擣衣」に次のようにある。

微芳起兩袖 微芳 兩袖より起こり  
輕汗染雙題 輕汗 双題を染む  
〔文選〕卷三十

これは詩題にあるとおり、遠方にいる男性を思いながら女性が砧打つさまを詠んだものであり、やはり女性が遠方の男性を思うものである。

9 再會期何日 10 臨江思遠哉

第10句に見られる「臨江」という言葉は、謝靈運「南樓中望所還客」に次のようにある。

登樓爲誰思 樓に登りて誰が為にか思ふ  
臨江遲來客 江に臨みて來客を遲つ

これは再会を期して別れた友人の再訪を高殿でひたすらに待ち続ける姿を詠むものである。この詩に関しては男性と女性ではないが、高殿で遠方にいる相手を思うというシチュエーションはやはり漱石「古別離」と共通するものである。

13 迢迢從此去 14 前路白雲堆

「從此去」の三字については、蘇武「詩四首」其三に近い表現がある。

參辰皆已沒 參辰皆已に没し、  
去去從此辭 去り去りて此より辭せん

『文選』卷二十九

この詩は李陵「与蘇武」三首（『文選』卷二十九）とともに五言詩の祖と言われるものである。李陵と蘇武は漢武帝の頃に匈奴の地に在ったが、後に蘇武のみが漢に帰国することとなり、その別れの宴で作られたのがこの一連の詩であると言われている。実際は李陵と蘇武の作ではなく偽作の可能性があるが、それでも送別詩の最初期の作と考えられる。

「鳥獸」など、詩なら「補亡」「公讌」「詠史」といった具合である。ここで本章で取り上げた例を見ると、卷三十一の江淹「雜體詩」以外は全て『文選』では「雜詩」類に分類されている。江淹「雜體詩」は「雜詩」類に収められた張華の詩を模擬したものであることを考えれば、全てが「雜詩」類の詩であるとも言える。しかも先に述べた張衡「四愁詩」と「古詩十九首」も、やはり『文選』卷二十九「雜詩」類に収められている。つまり漱石「古別離」の『文選』由来の表現は、殆どが『文選』の「雜詩」類の作品に出てくる表現なのである。実際に漱石「古別離」中の『文選』「雜詩」類に類例のある表現をマーキングしてみると、以下のようになる。

上樓湘水綠	捲簾明月來	雙袖薔薇香	千金琥珀杯
窈窕鳴紫篴	徒倚暗淚催	二八纒畫眉	早識別離哀
再會期何日	臨江思邈哉	徒道不相忘	君心曷得回
迢迢從此去	前路白雲堆	撫君金錯刀	憐君奪錦才
不贈貂襜褕	却報英瓊瑰	春風吹翠鬢	悵切下高台
欲遺君子佩	蘭渚起徘徊		

こうしてみると、やはり漱石「古別離」は『文選』で「雜詩」類に分類された詩の中の、別れをテーマにした作品から表現を借りてきたものであることが分かる。それらを骨格として再構成し、さらに別の表現を追加することで作成されたのが漱石「古別離」であると考えられ

「高台」は冒頭の「樓」と同義かと思われるが、曹植「雜詩六首」其一に次のようにある。

高臺多悲風	高台悲風多
朝日照北林	朝日照北林
之子在萬里	之子在萬里
江湖迴且深	江湖迴かにして且つ深し

『文選』卷二十九

この詩は「之子在萬里」（之の子 万里に在り）とあるように、遠く離れていて会えない親しい人のことを思いやるといふ内容になっており、やはり別れの詩である。

以上「古詩十九首」以外の例を見ると、概ね二つの共通点がある。一つは「古詩十九首」の場合と同じく、全てが別れ、それも多くは遠方にある男性を思う女性の嘆きをテーマにしたものだということである。そしてもう一つは、『文選』卷二十九から卷三十一までに集中していることである。『文選』は全体が「賦」「詩」「騷」など三十七の文体に分かれているが、『文選』序に「詩賦體既不一、又以類分。」（詩賦の体既に一ならず、又た類を以て分つ。）と言っており、それぞれが更にテーマによって分類されている。例えば賦なら「京都」「紀行」

る<sup>22)</sup>。

### 六 『楚辭』との重なり

以上、漱石「古別離」と『文選』の言葉の重なり具合を調べた結果、漱石「古別離」は古詩十九首を中心に、『文選』の「雜詩」類に分類される詩の中の別れをテーマとしたものから表現を集めて構成されていると考えた。漱石が「二三枚通読致候」と述べていたのはさすがに謙遜としても、その言葉の元になったのはこのような『文選』「雜詩」類から表現を借りてくるという作り方なのではないかと思われる。

しかしここでもう一点気になることがある。それはこの詩の中には『文選』とあわせて、『楚辭』をイメージさせる表現が見られることである。その最も顕著な例が漱石「古別離」の末尾、第21・22句である。

21 欲遺君子佩 22 蘭渚起徘徊

この句について、先ほどは類例として「古詩十九首」其六を指摘した。しかしもう一つ「佩」「蘭」と言って第一に思い出されるのが、屈原「離騷」である<sup>23)</sup>。

紛吾既有此内美兮	紛として吾既に此の内美有り
又重之以脩能	又た之に重ぬるに脩能を以てす

扈離與辟芷兮  
紐秋蘭以爲佩

江離と辟芷とを扈り  
秋蘭を紐ぎて以て佩と爲す  
〔『楚辭』卷一〕

これは「離騷」の冒頭部分、屈原が自身の出自の由緒正しさと能力を高らかに述べる場面であるが、ここに君子の象徴たる蘭の花を珮玉のように身につけることが詠われている。他にも屈原「離騷」に次のような例もある。

戸服艾以盈要兮

戸ごとに艾を服して以て要に盈  
ち

謂幽蘭其不可佩

幽蘭は其れ佩ぶべからずと謂ふ  
〔『楚辭』卷一〕

漱石「古別離」のみでは何故女性が「蘭渚」から珮玉を贈ろうとするのか分からないが、ここで「離騷」が重ねられていると考えれば、女性は君子にふさわしい花として男性に蘭の花を贈ろうとしているのだということになる。続けて順に他の『楚辭』系作品と重なる表現を見てみたい。

### 1 上樓湘水綠

### 2 捲簾明月來

第1句「湘水」は先ほど張衡「四愁詩」にも見られると指摘したが、これは広西チワン族自治区に発して洞庭

湖に注ぐ川で、舜の後である娥后と女英が身を投げた川として知られると同時に、『楚辭』の舞台としても知られる。この「湘水」という言葉は東方朔「七諫・哀命」に見られる。

何君臣之相失兮

何ぞ君臣の相失へる

上沅湘而分離

沅湘に上りて分離す

測汨羅之湘水兮

汨羅の湘水を測り

知時固而不反

時の固よりして反らざるを知る

〔『楚辭』卷十三〕

湘水は『楚辭』の中でも「沅湘」「江湘」「湘流」「湘君」「湘夫人」などの言葉として頻出し、『楚辭』を強くイメージさせる言葉である。漱石「古別離」で湘水という固有名詞を出したということは、読者に対して『楚辭』のイメージを与えようとしているように思われる。

### 5 窈窕鳴紫籥

### 6 徙倚暗淚催

第5句「窈窕」はまず『毛詩』周南「閟雎」の「窈窕淑女、君子好逑」(窈窕たる淑女は、君子の好逑。)が思い出されるが、屈原「九歌・山鬼」にも見られる言葉である。

既含睇兮又宜笑

既に睇を含みて又た宜く笑ふ

子慕予兮善窈窕

子予の善く窈窕たるを慕ふ

乘赤豹兮從文狸

赤豹に乗りて文狸を従へ

辛夷車兮結桂旗

辛夷の車に桂旗を結ぶ

被石蘭兮帶杜衡

石蘭を被りて杜衡を帯び

折芳馨兮遺所思

芳馨を折りて思ふ所に遺る

〔『楚辭』卷二〕

これは山中に住まう神の姿を描写した場面であるが、その神のおやかな姿のことを「窈窕」と称している。またここにも、蘭を身につけた人が相手に花を贈ろうとする記述が見られる。

第6句「徙倚」は厳忌「哀時命」に次のようにある。

然隱憫而不達兮

然して隱憫して達せず

獨徙倚而彷徨

独り徙倚して彷徨す

〔『楚辭』卷十四〕

王逸注に「徙倚、猶低徊也。言己隱身山澤、内自憫傷志不得達、獨徘徊徜徉而遊戲也。」(徙倚は、猶ほ低徊のごときなり。言ふところは己身を山沢に隠し、内自ら志の達するを得ざるを憫傷し、独り徘徊徜徉して遊戲するなり。)とあるように、志を達することができずに彷徨うことを言う。

### 7 二八纒畫眉

### 8 早識別離哀

詩題にもある第8句「別離」については、屈原「九歌・少司命」に次のようにある。

悲莫悲兮生別離

悲しきは生別離より悲しきは莫く

樂莫樂兮新相知

樂しきは新相知より樂しきは莫し

〔『楚辭』卷二〕

これは文字通りの表現と言ってもいいだろう。世の中に生き別れよりも悲しいものはなく、新たな出会いほど楽しいものはないという。

また先に、張衡「四愁詩」は序の説明に従えば屈原「離騷」を祖型とするものであると述べた。つまり「四愁詩」も『楚辭』の系統に属する作品であると考えれば、漱石「古別離」は全体に『楚辭』系統の言葉が鏤められていると言える。

それではそもそも漱石にとつての『楚辭』とはどのような作品であるのか。冒頭に引いた小宮豊隆の言葉にあるように、漱石は『楚辭』を熟読していたことは間違いない。もちろん幼くして漢籍に触れていた漱石が『草枕』執筆時に初めて『楚辭』に触れたはずはない。

「よろしい。駄目、駄目、駄目と。夫で片付いた。

——僕は其話を聞いて、実に驚ろいたね。そんな所で君がバイオリンを独習したのは見上げたものだ。慥独



にして不群なりと『楚辞』にあるが寒月君は全く明治の屈原だよ」

「屈原はいやですよ」

『吾輩は猫である』

これは登場人物の一人越智東風が水島寒月を評した言葉であるが<sup>24</sup>、この「惇独にして不群なり」というのは屈原「九章・抽思」の次の部分に基づく。

倡曰有鳥自南兮 倡に曰く 鳥有り 南よりす  
來集漢北 來たりて漢北に集まる  
好娉佳麗兮 好娉佳麗にして  
胖獨處此異域 胖れて独り此の異域に処る  
既惇獨而不群兮 既に惇独にして群せず  
又無良媒在其側 又た良媒の其の側に在る無し

『楚辞』卷四)

これは南からやって来た美しく立派な鳥が他と別れてひとりぼっちで住んでいるという部分である。東風の言葉は茶化してのものではあるが、このような才ある者が毅然と卓立する姿こそ、漱石が屈原に対して懐いているイメージであるのだろう。

漱石「古別離」は明治三十二（一八九九）年五月十九日に子規に贈られたが、その二ヶ月前の三月二十日には子規から漱石に以下のような記載のある手紙が送られて

6 君子空穆恣	君子 空しく穆恣
7 悵望不可就	悵望するも就くべからず
8 碧蕪徒傷神	碧蕪 徒らに神を傷ましむ
9 憶昔交遊日	憶ふ 昔 交遊の日
10 共許管鮑貧	共に管鮑の貧を許す
11 斗酒凌乾坤	斗酒 乾坤を凌ぎ
12 豪氣逼星辰	豪氣 星辰に逼る
13 而今天一涯	而今 天の一涯
14 索居負我真	索居 我が真に負く
15 客土我問禮	客土 我 礼を問ひ
16 舊廬君賦春	旧廬 君 春を賦す
17 二百余里別	二百余里の別れ
18 三十一年塵	三十一年の塵
19 塵纒無由濯	塵纒 濯ふに由無く
20 徘徊滄浪津	徘徊す 滄浪の津
21 寄語子規子	語を寄す 子規子
22 莫爲官遊人	官遊の人と爲る莫かれ

この詩の冒頭八句では、険しき山の向こうにいる「穆恣」たる君子の姿を一目見たくとも見れぬと歎く。第6句「穆恣」は『淮南子』に出る言葉で、「原道訓」に「穆恣隱閔、純德獨存。」（穆恣 隱閔として、純德 独り存す。）とあるのを踏まえる。「穆恣」は『淮南子』高誘注に「穆恣隱閔、皆無形之類也。」（穆恣隱閔は、皆無形の類なり。）とあり、形や兆しが無いことを言うが、ここでは続く「純

いる<sup>25</sup>。

年始以来は全く寒氣に惱され終日臥褥する事少からず時には發熱などあり全體に身體疲勞致候ためほとと、きすの原稿思ふやうに書けず若し四頁以上の原稿を書くとなるといつても徹夜致し、そして後で閉口致すやうな次第に有之候

前年の明治三十一（一八九八）年、弟子の高浜虚子によつて雑誌『ホトトギス』が東京に移つて発行されることになつたものの原稿集めに苦勞していたようで、この手紙でも漱石に何か書いてもらえないか嘆願している。この手紙の文章からは、病の悪化により体調の優れぬ中、精力的に俳句の研究に力を注がんとする子規の姿が垣間見える。そのような子規に姿に屈原を重ねるところがあるのではないか。

他にも、漱石が同じ明治三十二（一八九九）年子規に贈つた詩の中に次のようなものがある<sup>26</sup>。

夏目漱石「客中逢春寄子規」  
1 春風逼東臯 春風 東臯に逼く  
2 門前碧蕪新 門前 碧蕪 新たなり  
3 我懷在君子 我が懷ひは君子に在り  
4 君子隔嶼嶼 君子 嶼嶼を隔つ  
5 嶼嶼不可跋 嶼嶼 跋ゆべからず

徳獨存」を意識して、純粹な徳を独り内に秘めて外に出さずにいることを言うと思われる。これは正しく「惇独」たる屈原の姿と同じではなからうか<sup>27</sup>。また最後の四句はよく知られた屈原「漁父辞」を踏まえた表現である。

滄浪之水清兮 滄浪の水 清まば  
可以濯吾纒 以て吾が纒を濯ふべし  
滄浪之水濁兮 滄浪の水 濁らば  
可以濯吾足 以て吾が足を濯ふべし

『楚辞』卷七)

『楚辞』を踏まえて教師として宮仕えをするようになった自分を冠の紐を洗いたくとも洗えず、隠者の世界への渡し場をさまよう者と位置づけ、子規にはそうなつてはならないと忠告する。この表現を見ても、子規を屈原と重ねつつ、そのようには振る舞えない自分を嘆いていると言える。

かように漱石は闘病しつつも志を失わぬ子規の姿を屈原と重ねていた。その意識が詩中に『楚辞』の言葉を使わせているのではないかと思われる。

## 七 おわりに

以上、本稿では漱石「古別離」と『文選』の比較を行った結果、漱石は『文選』の「雜詩」類所収の詩、特に

「古詩十九首」を中心に別れをテーマにした詩をピックアップし、そこから抽出した表現を中心に再構成して「古別離」を作成したのではないかと考えた。これ自体は漱石自身が「文選を一部購求帰宅の上二三枚通読致候」というのに近いかもしれないが、少なくとも「一夜漬の作品」と評するほど簡易なものではないと思われる。またこのように、「文選」をある種名文の見本帳として、類書的に用いる読み方は、漱石だけでなく近代の日本人が漢詩文を著す時の常套の一つであったのではないだろうか。また本稿ではもう一点、漱石「古別離」には『楚辞』に由来する言葉が多用されていることも指摘した。ここには才を持ちながら病によってその力を發揮できず、しかし挫けずに努力する子規の姿と、志を得ずに苦しみつつも挫けない屈原の姿を重ねる漱石の思いがあるのではないかと考えた。

さらにもう一点付け加えたい。『木屑録』に収められた若い頃の漱石の漢詩に、次のようなものがある<sup>[29]</sup>。

夏目漱石「木屑録」より十四首<sup>一</sup>其五

鹹氣射顔顔欲黄 鹹氣顔を射て 顔黄ならんと欲す

醜容對鏡易悲傷 醜容鏡に對して悲傷し易し

馬齡今日廿三歳

馬齡今日廿三歳

始被佳人呼吾郎 始めて佳人の吾が郎と呼ぶを被る

この詩の第4句は分かりにくいだが、『木屑録』の次の記載が参考になる<sup>[29]</sup>。

客舍得正岡獺祭之書。書中戲呼余曰郎君、自稱妾。余失笑曰、獺祭諧謔、一何至此也。輒作詩酬之曰、「鹹氣射顔顔欲黄、醜容對鏡易悲傷。馬齡今日廿三歳、始被佳人呼我郎。」(客舎にて正岡獺祭の書を得たり。書中戲れに余を呼びて郎君と曰ひ、自ら妾と稱す。余失笑して曰く、「獺祭の諧謔、一に何ぞ此に至れるや」と。輒ち詩を作して之に酬みて曰く、「鹹氣顔を射て顔黄ならんと欲す、醜容鏡に對して悲傷し易し。馬齡今日廿三歳、始めて佳人の我が郎と呼ぶを被る」と。)

何と子規からふざけて自身を「妾」、漱石を「郎君」と称する手紙が来たというのである。また明治二十二年(一八八九)年九月二十七日付の正岡子規宛の手紙では、今度は漱石が戯れに「郎君」と自称し、子規を「妾」と呼んでいる<sup>[30]</sup>。漱石「古別離」自体は「楼上の思婦」の系譜を引く、女性の立場から遠方の男性を思いやるという形式の詩であり、その男女の間の愛情が漱石と子規の間の友情の仮託になっていると考えられるが、もしこのような若い頃の戯れのやりとりを忘れていなかったならば、漱石「古別離」はかつての青春の日の思い出を念頭に、

しかし今その才ある友が不遇を託していること、また会いたくとも会えぬことを歎く詩であると考えられることもできているのではないだろうか。

本稿では漱石「古別離」に見られる表現がどこから来ているのかについて考察を試みるにとどまったが、なぜその表現が選び取られたのか、また再構成の方法にどんな傾向があるのかという問題について、また漱石の漢詩全体に於ける『文選』や『楚辞』の影響という問題については、稿を改めて論じたい<sup>[31]</sup>。

## 注

[1]『定本漱石全集』第十八卷(岩波書店二〇一八)七七頁。断句と書き下し文は筆者による。

[2]大正五年八月二十一日付の久米正雄・芥川龍之介宛の書簡『定本漱石全集』第二十四卷(岩波書店二〇一九)四三三〜四三四頁)に「僕は不相変『明暗』を午前中書いてゐます。心持は苦痛、快樂、器械的、此三つをかねてゐます。存外涼しいのが何より仕合せです。夫でも毎日百回近くもあんな事を書いてゐると大いに俗了された心持になりますので三四日前から午後の日課として漢詩を作ります。日に一つ位です。さうして七言律です。中々出来ません。厭になればすぐ已めるのだからいくつ出来るか分りません。」とある。

[3]小宮豊隆「解説」『草枕』新潮文庫一九五〇)一五四頁。なお小宮豊隆『漱石の藝術』(岩波書店一九五〇)九一頁にも「漱石は『草枕』を書き出す前に『楚辞』を讀んだと言つ

てみただけであつて、『草枕』の文章は、漢文脈の勝つた、絢爛無比の文章である。」とある。

[4]漱石が初めて漢学を学び始めたのはもう少し前だったという説がある。荒正人・小田切秀雄『増補改訂漱石研究年表』(集英社一九八四)「明治十一年」の項「『正成論』を書く」(六四頁)の注四に「漢学の初歩を断片的に学んでいたと思われるが、独学によるものか漢学塾に通つたものかよく分らぬ。これは、当時としては普通のものともみなされる。(石川忠久)森田草平は、漱石から聞いた話として、島崎友輔(柳鳩)の父が浅草鳥越(現・台東区鳥越一、二丁目)で、寺子屋のような漢学塾を開いていたので、そこに通っていたと述べている。その時期が何時頃かよく分らぬが、小学校上級か卒業してからはないかと想像される。」とある。

[5]復本一郎『正岡子規伝―わが心世にしのこらば』(岩波書店二〇二二)第一章「伊予の儒者大原観山の孫」を参照。なお大原観山については、加藤国安『大原観山詩集―子規の外祖父・藩校生の日々』(研文出版二〇二〇)を参照。

[6]『子規全集』第十卷(講談社一九七五)四〇〜四一頁。

[7]『子規全集』第八卷(講談社一九七六)。

[8]『子規全集』第九卷(講談社一九七七)。断句と書き下し文は筆者による。

[9]『定本漱石全集』第十八卷(岩波書店二〇一八)二五頁。書き下し文は筆者による。

[10]『定本漱石全集』第二十二卷(岩波書店二〇一九)一八三頁。なお現在東北大学付属図書館所蔵の漱石の旧蔵書群であ

る漱石文庫に収められた『文選』と題する書は、岡三郎「漱石の漢詩「古別離」と「雜興」の比較文学的研究——とくに『文選』との関連において〔熊本時代の漱石②〕」（『青山学院大学紀要』二〇一九七八）および「東北大学デジタルコレクション・漱石文庫データベース」（東北大学付属図書館ホームページ）によれば、以下の三点が現存する。

- ・明・王象乾刪訂・宇都宮遜菴校『文選音註』 風月荘左衛門貞享四年
- ・清・顧施禎『昭明文選六臣彙註疏解』 康熙二十六年序 心耕堂
- ・清・于光華編『重訂文選集評』 金匱書業堂 乾隆五十一年

ただし岡氏によれば、『重訂文選集評』は大正元年に橋口貢から贈られたものであるため、この時購入した『文選』ではない。残り二書のどちらかがこの時のものか、或いは更に別の『文選』が存在したのかは定めない。

- 〔11〕『漱石全集』第十二卷（一九六七）の口絵に「古別離 失題 明治三十一 長尾雨山加筆」として雨山が朱筆を入れた原稿の写真が載せられており、その末尾に「明治三十二年四月稿 乞斧正」と記されている。また『龍南會雜誌』は「熊本大学学術リポジトリ」により全号閲覧可能となっている。
- 〔12〕選訳まで含めると漱石の漢詩の訳注は多数存在するが、本稿で参考にしたものを全訳に限って挙げておく。

- ・松岡譲『漱石の漢詩』 朝日新聞社 一九六六
- ・吉川幸次郎『漱石全集』第十二卷 岩波書店 一九六七
- ・吉川幸次郎『漱石詩注』 岩波新書 一九六七のち岩波文庫

ストとして『文選』景清胡克家重雕宋淳熙刊本（中華書局一九七七）を使用する。なお『樂府詩集』卷七十一「雜曲歌辭」には「古別離」の樂府題があり、この江淹「古別離」を最初に挙げる。

- 〔19〕吉川幸次郎『漱石詩注』に「張衡の『四愁の詩』では「英瓊瑤」であるが、ここは脚韻をふむために改めた。」とある。

〔20〕川合康三・富永一登・釜谷武志・和田英信・浅見洋二・緑川英樹『文選 詩篇』五（岩波文庫 二〇一九）二八一頁に「本詩は『玉台新詠』巻九にも張衡『四愁の詩四首』として収められ、そこには『序』はなく、男女の愛情にまつわる歌として呈示されている。：（中略）：おそらく本来は『玉台』系の歌謡だったのを、後漢前半を代表する文人であった張衡に擬し、さらに『序』を加えたものだろう。」とある。ここでは漱石は『文選』で張衡「四愁詩」を見たと考えているので、序の方向に従って理解する。

- 〔21〕「楼上の思婦」については、矢嶋美都子「楼上の思婦——閨怨詩のモチーフの展開——」（『日本中国学会報』第三十七号 一九七五）に詳しい。

〔22〕本稿では『文選』との関係に限定して考察しているが、本詩には『文選』以外にも類似表現があることが指摘されている。例えば吉川幸次郎『漱石詩注』は第4句「千金琥珀杯」（千金 琥珀の杯）について「杜甫の句に『春酒の杯は濃くして琥珀薄し』」と言い、第十六句「奪錦才」（奪錦の才）について「明の高啓、すなわち高青邱に、『慙ずらくは奪錦の才無きことを』という句がある」と指摘されている。その他

二〇〇一

- ・飯田利行『漱石詩集訳』 国書刊行会 一九七六
  - ・中村宏『漱石漢詩の世界』 第一書房 一九八三
  - ・佐古純一郎『漱石詩集全釈』 二松学舎大学出版部 一九八三
  - ・飯田利行『新訳漱石詩集』 柏書房 一九九四
  - ・一海知義『漱石全集』第十八卷 岩波書店 一九九五
  - ・興膳宏新注『定本漱石全集』第十八卷 岩波書店 二〇一八
- また注〔10〕に示した岡氏の論考でも本詩について詳細に検討されている。

- 〔13〕松岡譲『漱石の漢詩』 九五頁。
- 〔14〕吉川幸次郎『漱石詩注』（岩波文庫） 八七頁。
- 〔15〕飯田利行『漱石詩集訳』 一三六頁〜一三七頁。後年の『新訳漱石詩集』にも同様の記載があり、同氏『漱石 天の掟物語』（国書刊行会 一九八七）二七九頁〜二八四頁でも詳しく述べられている。大塚楠緒子（一八七五〜一九一〇）は佐々木信綱に師事した女性歌人であり、漱石意中の女性であったとも言われるが、明治二十八（一八九五）年に小屋保治と結ばれた。明治四十三（一九一〇）年にインフルエンザからの肋膜炎で亡くなった際、病床で葬儀に参列できなかった漱石は追悼の句を手向けている。原武哲『夏目漱石周辺人物事典』（笠間書院 二〇一四）参照。
- 〔16〕小坂晋『漱石の愛と文学』（講談社 一九七四年） 四五頁。
- 〔17〕中村宏『漱石漢詩の世界』 一二五頁。
- 〔18〕注〔10〕で述べたとおり、漱石が実際に見た『文選』が如何なるものであったかは分からないので、今は『文選』のテキスト

にも一海知義『漱石全集』注は第4句「千金琥珀杯」について「蘇賦の詩『皇太后閣』六首（端午帖子詞）の第二首に『萬歲菖蒲の酒、千金琥珀の杯。』と指摘するなど、唐代以降の詩からも表現を取り込んでいる。ただしいずれにしても、量的には『文選』『雜詩』から借りた表現が中心であると思われる。

- 〔23〕『楚辭』のテキストは『楚辭補注』（中華書局 一九八三）を使用する。
- 〔24〕『定本漱石全集』第一卷（岩波書店 二〇一六） 四九〇頁。
- 〔25〕『子規全集』第十卷（講談社 一九七五） 四〇〜四一頁。
- 〔26〕『定本漱石全集』第十八卷（岩波書店 二〇一八） 二四頁。書き下し文は筆者による。
- 〔27〕『淮南子』で「穆恣」とセットになっている「隱閔」という言葉は、先ほど「徙倚」で挙げた『楚辭』『哀時命』に見られる、『楚辭』に隣接する言葉である。
- 〔28〕『定本漱石全集』第十八卷（岩波書店 二〇一八） 一〇頁。書き下し文は筆者による。
- 〔29〕『定本漱石全集』第十八卷（岩波書店 二〇一八） 七九頁。
- 〔30〕『定本漱石全集』第二十二卷（岩波書店 二〇一九） 一〇〜一一頁。
- 〔31〕漱石の詩に見られる雲の描写と『文選』の関係については、拙稿『「白雲」と「孤雲」——「眼耳双忘身亦亡、空中独唱白雲吟」句をめぐる——』（坂元昌樹・田中雄次・西楨偉・福澤清編『漱石と世界文学』思文閣 二〇〇九）で論じた。また『草枕』に見られる『文選』の言葉については、中村宗彦

「文選語の流れ——『日本書紀』から『草枕』まで——」（『山邊道』第三三号 天理大学国語国文学会一九八九）がある。